

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。() の左側は口語訳です。(12点)

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒などをすすめけるに、氷魚

人のもとへたずねていった。(あるじが僧に)酒をすすめた時に、あゆの稚魚

はじめて出できたりければ、あるじ、めづらしく思ひて、もてなしけり。あ

--- 手に入ったので

(氷魚をだして)もてなしていた

るじ、ようの事ありて、内へ入りて、又、出でたりけるに、この氷魚の、こ

--- 用事があつて

とのほかにすくなくなったりければ、あるじ、いかにと思へども、いふべき

想像以上に少なくなつていたので、

なんということだと思つたが、

やふもなかりければ、物がたりしるたりける程に、この僧の鼻より氷魚の一

--- 話を続けていたところ

つ、ふと出でたりければ、あるじ、あやしうおぼえて、「Aその御鼻より氷魚

の出でたるは、いかなる事にか」といひければ、とりもあへず、「Bこの頃の

--- すかさず

氷魚は目鼻より降り候ひなるぞ」といひければ、人みな、「は」とわらひけり。

人は皆、「ははは」と笑つたのであった。

(『宇治拾遺物語』による)

問1 いふべきやふも とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。(3点)

いづべきやうも

問2 あやしうおぼえて とありますが、それはなぜですか。理由を説明した次の文の空欄に当てはまる内容を十二字以内で書きなさい。(3点)

氷魚が少なくなったことを言うべきではないと思つていたところ、僧の鼻からあゆの稚魚が出てき

たから。

問3 傍線A、Bの主語の組み合わせとして正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- | | | | | | |
|---|-------|-------|---|-------|-------|
| ア | A 僧 | B あるじ | イ | A 僧 | B 僧 |
| ウ | A あるじ | B 僧 | エ | A あるじ | B あるじ |

問4 本文の内容を述べたものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア ある僧が人のもとへ行った時に、酒と一緒に氷魚をすすめられた。
- イ 僧が用事があつて席を外している時に、あるじが氷魚を食べた。
- ウ 僧は氷魚が少なくなっていることを、あからさまに言うべきではないと思った。
- エ この頃は氷魚が降ってくると言うと、人はみな馬鹿にした。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。()の左側は口語訳です。(12点)

惟継中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、読経うちして、

「自然の風物をもとに詩歌などを作る才能

寺法師の田伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、

同じ寺に住みともに学ぶこと

坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは

寺法師と申し上げていましたが

法師とこそ申さめ」と言はれけり。いみじき秀句なりけり。

言い回しが巧みな言葉

『徒然草』による

問1 あひて とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。

あいて

問2 今よりは法師とこそ申さめ とありますが、それはなぜですか。十五字以内で理由を説明しなさい。(3点)

寺が焼けてなくなったから。

問3 あひての主語として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 惟継中納言

イ 田伊僧正

ウ 三井寺

エ 寺法師

奈良の都 平城京

仏家のきまつた時間の食事の時も、そうでないときも

これも今は昔、南京の永超僧都は、魚なき限りは、時、非時もすべて食はざりける人なり。公請勤めて、在京の間久しくなりて、魚を食はで、くづほれて

仏について説く講師を勤めて

体力が衰えて

下る間、奈島の丈六堂の辺にて、昼破子食ふに、弟子一人近辺の在家にて、魚奈良に帰る間

を乞ひて、勧めたりけり。件の魚の主、後に夢に見るやう、恐ろしげなる者ども、その辺の在家をしるししけるに、我が家しるし除きければ、尋ねぬる所に、

不気味な者

使の曰く、「永超僧都に魚を奉る所なり。さてしるし除く」といふ。その年、

この村の在家、ことごとく疫をして、死ぬる者多かりけり。その魚の主が家、

「軒残らず家の者が疫病にかかり、

ただ一字、その事を免ぬるによりて、僧都のもとへ参り向ひて、この由を申す。

この話を申し上げた

僧都この由を聞きて、被物一重賜びてぞ帰されける。

引出物の衣類「揃い」を賜って帰された

問1 食はざりける とありますが、この部分を現代仮名遣いになおさない。

くわぢりける

問2 勧めたりけり とありますが、この部分の主語として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 僧都 イ 魚 ウ 弟子 エ 魚の主

問3 この話における夢の内容が語られている部分を探し、その最初と最後の四字を書き抜きなさい。ただし、句読点を含むものとする。

恐ろしげくといふ。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。() ……の左側は口語訳です。

或人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の言はく、

「本の矢を手にはさんで、

「初心の人、ふたつ矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、はじめの矢になおざ

いいかげんな

りの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」と言ふ。わづか

この「矢で決着をつけようと思へ」

に二つの矢、師の前にてひとつをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづ

なまける心

から知らずといへども、師これを知る。この戒め、万事にわたるべし。

すべてのことに通じるものである

道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、か

夕方には朝があるだろうと思ひ、

さねてねんごろに修せんことを期す。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の

ましてや「瞬のうち」に

心ある事を知らんや。なんぞ、ただ今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。

「瞬のうちになすべきことをすぐに実行すること」が

『徒然草』による

問1 定むべしと思へ とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直しなさい。

さだむべしとおもえ

問2 みづから知らずといへども とありますが、この部分の訳として最も適切なものを後のア～エの

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分でよく知っているとしても

イ 自分では気づかなくても

ウ 自分が知りたいと思っていなくても

エ 自分にとってはどうでもよくても

問3 言ふの主語を文章中から書き抜きなさい。

師

問5 この作品と同じ種類(ジャンル)の古典作品を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 枕草子

イ 竹取物語

ウ 平家物語

エ 東海道中膝栗毛

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。() ……の左側は口語訳です。

これも今は昔、多田満仲のもとに猛く悪しき郎等ありけり。物の命を殺すを

荒々しく悪い家来がいた

もて業とす。野に出で、山に入りて、鹿を狩り、鳥を取りて、いささかの善根

――商売

――少しも良い行いを

する事なし。ある時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはげ、弓を引き

することがない。

矢をつがえて

て、鹿に随ひて走らせて行く道に、寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと見

ふと!

やりたれば、内に地藏立ち給へり。左の手をもちて弓を取り、右の手して笠を

脱ぎて、いささか帰依の心をいたして馳せ過ぎにけり。

――少しばかり信仰する気持ちを起こして、走りすぎていった。

その後いくばくの年を経ずして、病つきて、日比よく苦しみ煩ひて、命絶えぬ。

病にかかつて

冥途に行き向ひて、閻魔の庁に召されぬ。見れば、多くの罪人、罪の軽重に

多くの罪人が、罪の軽重によつて

随ひて、打ちせため、罪せらるる事いといみじ。我が一生の罪業を思ひ続けるに、

――罰せられることはなほだし

A 涙落ちてせん方なし。

――涙が落ちてどうしようもない。

かかる程に、一人の僧出で来りて、のはまはく、「汝を助けんと思ふなり。早

――お前を助けようと思うのだ。

く故郷に帰りて、罪を懺悔すべし」とのたまふ。僧に問ひ奉りて曰く、「Bこれは

誰の人の、かく仰せらるるぞ」と。僧答へて給はく、「我は、汝鹿を追うて寺の

どなたで、このように仰せられるのですか

前を過ぎしに、寺の中にありて汝に見えし地蔵菩薩なり。汝罪業深重なりといへ
寺のなかになつて、お前に見えた地蔵菩薩である。

ども、いささか我に帰依の心の起りし功によりて、吾いま汝を助けんとするなり」
とのたまふと思ひて、よみがへりて後は、殺生を長く断ちて、地蔵菩薩につかう
まつりけり。
生き返つた。その後は、

(『宇治拾遺物語』による)

問1 のたまふ とありますが、この部分を現代仮名遣いになおさない。

のたもう

問2 A涙落ちてせん方なし とありますが、それはなぜですか。理由を説明した文の空欄に十二字
以内で言葉を補い説明を完成させない。

目の前で閻魔によって罪人が裁かれており、生前**悪い行いばかり**していたことを思つて、どのよ
うに裁かれるのか不安だったから。

問3 Bこれは誰の人の、かく仰せらるるぞ とありますが、この部分の主語として最も適切なものを、
あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 満仲

イ 郎等

ウ 閻魔

エ 僧

問4 この話において教訓をつけたとき、本文の内容上最も適切であると思われるものを、あとのア～
エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の行動には常に責任をもっていなければならないのである。
イ どのような状況でも主人には忠義を尽くすべきなのである。
ウ ひつこのことを究めれば死後もよみがえることができたのである。
エ **どんなときも信仰の気持ちを忘れてはならないのである。**

問5 宇治拾遺物語と同じ時代に成立した文学作品を後のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 土佐日記

イ 万葉集

ウ 伊曾保物語

エ 方丈記

学んだことを機会があるたびに復習して体得する、なんと喜ばしいことではないか。

子曰はく、「学びて時にこれを習ふ、

また説ばしからずや。」

①有朋自遠方来、②また楽しからずや。

人知らずして慍みず、また君子ならずや。」と。

③子曰はく、「故きを温めて新しきを知れば、もつて師たるべし。」と。

④子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」

子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」と。

問1 ①有朋自遠方来 は、「朋遠方より来たるあり」と読みます。そのような読み方になるように、返り点と送り仮名を補いなさい。(3点)

有^リ 朋 自^リ 遠 方 来^{タル}
下 二 一 上

問2 ②また楽しからずや を現代語訳しなさい。(3点)

なんと楽しいことではないか

問3 ③子曰はく、「故きを温めて新しきを知れば、もつて師たるべし。」と。からできた四字熟語を漢字で答えなさい。(2点)

温故知新

問4 ④子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」の中から置き字を書き抜きなさい。(2点)

而

問5 孔子の思想の中心を漢字一字で書きなさい。(2点)

仁

人に指示を出して

高名の木登りといひしをのこ、人をおきて、高き木に登せて梢を切らせしに、

軒程度の高さになって

いと危く見えしほどは言ふ事もなくて、おるるときに軒長ばかりになりて、「あやま
ちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるる
ともおりなん。如何にかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、

枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず
起るものでござります

仕る事に候」といふ。

あやしき下臈なれども、聖人の戒めになへり。鞠も、難き所を蹴出して後、
安く思へば、必ず落と侍るやらん。

(徒然草『第百九段』より)

問1 戒めになへり を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)
いましめになへり

問2 会話文A、B、Cのうち、主語が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。(3点)

B

問3 ①いと危く見えしほどは言ふ事もなくて とありますが、それはなぜですか。最も適切な理由を
あとのア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。(3点)

ア 危ないところはその危険さが似ていると知っているから。

イ 危ないところは逆に安全な部分を確認しやすいから。

ウ 危ないところは自分で危ないと感じて気をつけようとするから。

エ 危ないところは相手が危ないときに注意してくれるから。

問4 木から降りることと蹴鞠の話はどのようなところに共通点があるといえますか。次の書き出しに
続けて三十五字以内で説明しなさい。(4点)

木の話も蹴鞠の話も、**難しいところよりも、簡単だと思ふところの方が失敗しやすい**
点という点。

問5 本文の内容を表したものととして最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答え

なさい。(3点)

- ア 高名な木登りの男は、自分自身が木に登って、木の登り方の見本を示した。
- イ 木に登っていた人は飛び降りられるような高さになって注意を受けた。
- ウ 注意をした人は、木から降りる際に失敗しやすいのは、危ないとわかるところだと考えていた。
- エ 高名な木登りの男は非常に身分の高い人間であった。

非常に尊く

肖像画

昔、唐に、宝志和尚といふ聖あり。いみじく貴くおはしければ、御門、「かの聖の姿を、影に書きとらん」とて、絵師三人を遣はして、「もし一人しては、書き違ゆる事もあり」とて、三人して面々に写すべき由、仰せ含められて、遣はさせ給ふに、

三人の絵師がそれぞれ自分で写すようにと

三人の絵師聖のもとへ参りて、かく宣旨を蒙りて①まうでたる由、申しければ、

しばらく(待ちなさい)

「暫し」といひて、法服の装束して、出であひ給へるを、三人の絵師、おのおの

私の本当の姿がある。

書くべき②絹を広げて、三人並びて筆を下さんとするに、聖、「暫く。我がまことの

言われたので、

影あり。それを見て書き写すべし」とありければ、絵師左右なく書かずして、聖の

親指の爪

皮を左右に広げたところ、

御顔を見れば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右へ引き退けてあるよ

り、金色の菩薩の顔さし出でたり。一人の絵師は十一面観音と見る。一人の絵師は

聖観音と拝み奉りける。おのおの見るままに写し奉りて、持ちて参りたりければ、

③御門驚き給ひて、別の使を給ひて問はせ給ふに、かい消つやうにして失せ給ひぬ。

それよりぞ、「ただ人にてはおはせざりけり」と申し合へりける。

(宇治拾遺物語『宝志和尚影の事』より)

問1 出であひ給へるを を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)

いであいたまえるを

問2 ①まうでたる とありますが、この主語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。(3点)

(3点)

ア 宝志和尚 イ 御門

ウ

絵師

エ 聖

問3 ②絹を広げて とありますが、それは何のためですか。最も適切な理由をあとのア～エの中から

一つ選び記号で答えなさい。(3点)

ア 聖の話を書くときの座布団にするため。

イ 聖の服をより美しく飾るため。

ウ 聖からもらう仏像を丁寧に包むため。

エ 聖の絵をかくための布として使うため。

問4 ③御門驚き給ひて とありますが、帝がはっと驚いた理由を次のようにまとめました。次の書き出し続けて二十字以内で書きなさい。(4点)

一人の聖の肖像画を描いてくるように命令したのに、**絵師別々の絵を描いてきた**だから。

問5 本文の内容を表したものととして最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(3点)

ア 帝が絵師を三人遣わしたのは、絵師の実力が信用できなかつたためである。

イ 聖の絵を描いた三人の絵師には、それぞれが違う観音の顔を見せていた。

ウ 絵師とは別の使いの者には、聖の本当の顔がはっきりと見えていた。

エ 「和尚は普通の人であつた」と後の人は語り合つた。